

卒業生の歩んだ道

自由学園の手紙

① 卒業生の歩んだ道

自由学園の手紙 ① 卒業生の歩んだ道

…この人間は今は完全ではないか。完全をめざしてやっているところの者だという、それが心のいしるみにしるされたる紹介状だ。自由学園の出す証明書だ。…何事があっても、自由学園の生徒である、自由学園の使者である大使であるといつて構えで、どこへ行っても自由学園はそういう考え方を持ちそつて生活をしているのかと思われる様に、それが自由学園の光を放ち、説明になる。自由学園の手紙による。

（自由人をつくる）（スク羽仁の講話より）

発売元 婦人之友社 発行所 自由学園出版局

ISBN4-8292-0157-6 C1037 P2000E

定価2,000円

（本体1,942円）

まえがき

自由学園の最初の卒業生が目白の校舎を後にしてから七十年の時が過ぎ、既に女子部の卒業生は四千人に近く、男子部卒業生の数も千人を超えた。この五千人の一人一人は、羽仁両先生が基礎を置かれた手造りの教育によつて人間の生地を織つていただきました。この人達の卒業後の生き方は、自由学園の教育の姿を示すものであります。卒業生の歩みの跡を辿りこれを集めることができるならば、それは必ずや、羽仁吉一、もと子両先生が理念としてお示しになり、実行された人間教育がどのように結実したか、の報告書になるでしょう。

この本は、そのような報告書を作ることを念願して編集されました。ここに集めることのできましたのは、僅か三十五人の記録に過ぎません。しかもこの人達が学んだ時期は草創の活気に溢れていた目白時代、新天地南沢に移り、吉一先生が「黄金時代」と呼んだ昭和十年代のはじめ、精神的にも物質的にも苦難の波にもまれた戦時中、混乱を極めた戦後、そして両先生亡き後の試練の時期、とまことに多様です。それにもかかわらず、この人達の生き方に共通するものあることは、どなたにも読みとつていただけるのではないでしようか。それこそが、自由学園の人間教育の生き出すものであると思います。異なるた境遇において、異なった道を進みながら共通して放つ学園の香氣、それを是非お読みとりいただきたい、と願います。

この本の題「自由学園の手紙」は、吉一先生が長い休みの前に常に生徒達に呼びかけられた言葉です。パウロのコリントの信徒への手紙(二)の三章の出だしの部分を引用しながら、熱をこめて話されたことは、先生ご在世中に生徒であつた全ての人の脳裏に残つていてことでしょう。とびら、にありますのは昭和三十年七月十六日、一学期の終業式での先生の言葉の抜粋です(自由学園出版局刊「自由人をつくる」二八二ページ)。現に今、南沢で

学ぶ人はもとより、学園で人間の生地をつくっていたいた全ての人は、自由学園の手紙であり、大使であり続けるのです。

最初、この本をつくるために四十二人の方に執筆をお願いしました。しかし七人の方が健康上その他色々の事情で辞退されました。掲載されました三十五人の方の文は、書き方も重点の置き方もさまざまです。そこに特徴があり、面白さがあります。この三十五通の「手紙」は、自由学園の教育について知りたい、と思つておられる方に、きっとよい手掛けりを与えてくれることでしょう。今在校している人達、これから自由学園に学びたい、と考えている人達にきっと新たな希望と、大きな励ましを与えてくれることでしょう。そして、それぞれの文にある、羽仁両先生の言葉、そこから読みとることのできる学園の教育の神髄は、今この南沢で教育の重責を担っている者達全てに重要な指針を与えてくれるのであります。

今回ご執筆いただいたのは四十人に満たない方でした。まだまだ報告書を書いていただきたい方は沢山あります。近い将来に第二巻、第三巻を出版することがきっと必要になるでしょう。そして、自由学園の歴史の続く限り、新しい巻が発行され続けて行くのではないでしょうか。

この本の編集には、自由学園出版局既刊の「我が愛する生活」「自由人をつくる」「自由学園の生活文章」の編集を手がけた、男子部第一回生の佐々木淳氏があたり、販売には婦人之友社営業部の力を借りました。御礼申し上げます。

この本を、今天に在る羽仁吉一、もと子、そして恵子先生にお捧げできることを心からの喜びといたします。

一九九四年
四月

自由学園学園長 羽仁 聰

とびら 自由学園の手紙に

ミセス羽仁の思い出 〈特別寄稿〉

「郷里へ帰つて根城を守りなさい」

与えられた試練を越えんと

見えざる御手に導かれつ

キリストに惚れる

「隨所作主」を生きる

南澤考古学以来

御手の働きにより牧師になる

私の仕事と自由学園

神学者として牧師として

看護の変遷と共に歩む

この地に永遠の楽園を

私が建築家になるまで

婦人之友社相談役 千葉 貞子 8
向中野学園学園長 吉田 幾世 13
「明日の女」元編集長 ニリヤ会老人ホーム顧問 木下 淳子 33
母病院元事務長 東京トヨタ自動車 川村 傳 52
元常務取締役 ビショップ博物館 前人類学部長 高嶺 貞子 43
日本基督教大學教授 記録映画作家 野村 昌男 76
東邦大学医療短大教授 笹遠 嘉彦 66
古屋 安雄 羽田 澄子 84
国際基督教大學教授 天羽 道子 113
記録映画作家 伸田 妙子 104
かにた婦人の村施設長 伸田 妙子 104
建築家 吉岡 亮介 122

元鶴仙医科大学助教授 高岡 聰子 131

科学者への歩み

なにを見てもなにかを思い出す

自由学園への便り

生活することで支えられ

大学としての自由学園最高学部

「小さな凸」の提案から

自由学園略年譜

高エネルギー物理学研究所助教授 山本 明 276

東京造形大学助教授 篠田 達美 284

日本基督教団讃美教会 美術評論家 宮島 望 293

共勵学舎新得農場代表 森 雅子 303

横浜市立大学理学部助手 蟻川謙太郎 312

トヨコ商品開発部主事 星川 安之 321

331

装幀 佐々木 格

*配列は卒業年度の早い順とし、かなづかい、字句は年代のニュアンスを生かすため原文を尊重しました。(編者)

自由学園の手紙に

……つまり私たち それこそ自由だ こうしなくてはならないという規則でそうするのではないが それが何となく私どものよい感化を与える 自由学園の 庄名のない手紙のようなものだ

外国へ行く人は旅行免状というものを持つて これは日本国民にしてちゃんとした人間だとうことをこれが行くところの便宜を与えてやつてくれということを簡潔な言葉で書いてある みんなは心にキリストの証明書を持つて帰つてもらいたい

この人間は今は完全ではないが 完全をめざしてやつて いるところの者だという それが心のいしぶみに しるされたる紹介状だ 自由学園の出す証明書だ 事務ではなく良心の上から その人間にこれはたしかに自由学園の生徒であるという証明書を渡したい

何事があつても 自由学園の生徒である また毎年言う 自由学園の使者である大使であるというような感じで そういう心構えで 方々旅行してどこに行つても 自由学園はそういう考え方を持ちそういう生活をしているのかと思われるよう

それが自由学園の光を放ち

説明になる 自由学園の手紙になる……

(「自由人をつくる」昭和三十年七月十六日終業式における羽仁吉一先生の講話から)

された。この意図を曲げることも躊躇される。

ところが最近、この「きまり」のほうが大きく変わった。文部省が大学の設置基準を大幅に緩和したのである。教員の資格や施設の規模など、依然として多くの審査項目をクリアする必要があるが、カリキュラム編成には大学が独自性を出せるようになつたので、ユニークな大学や学部が続々と誕生していると聞く。もしも最高学部が、建学の精神を堅持しつつもなお基準に適合するように組織ができるのなら、ぜひこの機会に大学になつたらよいと思う。それによって、大学院に進学するにしても実業界に入るにしても、卒業生はこれまでよりずっとスムーズに事を運ぶことができるようになる。しかし、もし学園の思想を反映させた案に文部省が首をたてに振らなかつたら、わざわざ大学になることもないであろう。それこそ大学になどならなくとも、良き教育を志していれば必要なものはきちんと与えられるのだから。

（略歴）一九七九年 男子最高学部（27回生）卒業

一九八一年 上智大学大学院理学部研究科

生物科学専攻 修士課程

一九八三年 同専攻 博士課程

一九八六年 理学博士

ほかに、オーストラリア国立大学客員研究员、

アメリカ国立衛生研究所奨励研究员など

「小さな凸」の提案から

男子部36回生 星川 安之

トミー商品開発部主事

きっかけ

学部四年の就職活動の時期にも拘らず、同級の友人と重複障害児の通所施設に何回か通ううちに、麻痺した手、足を一生懸命動かし自分の感情を表現しようとする子供たちと出会い、表現のしようのないショックを受けた。そここの保母さんが「この子供達が遊べるおもちゃがもつと沢山あつたら…」とぼそっと言つたことが今の仕事をするきっかけになっている。おもちゃメーカー「トミー」に入社したのは一九八〇年、今から十四年前のこと。

トミーHT研究室

トミーの入社試験を受けるとき、面接で「障害を持った子供も楽しめるおもちゃを作りたいのですが、そのような部署はありますか?」と当時の人事部の課長に尋ねたところ、「今は君が言つているような部署はないが、近い将来出来る可能性がある」と言われた。

運よく入社六ヶ月後に「ハンディキャップトイ（HT）研究室」が新設され配属された。トミーを作った故会

長の「これからは、世界中のどんな子供達でも楽しく遊べるような玩具を作っていくさなさい」という遺訓の元に発足したこの部署での最初の仕事は、色々な障害を持つ子供達と会って、遊ぶことだった。自閉症、脳性麻痺、難聴児、知的障害、全盲、弱視など様々な子供達。最初の一年間で出会った子供達の数は千人を越すと思う。

一年間子供達、療育者、医者、障害児を持つ母親、父親と接してきて、わかつたことは全ての障害に対応できる玩具は理想だが、不可能に近いということ。ただ理屈や現状を分析ばかりしていても先へは進まない。「やれる所からやつていこう」それが結論だった。二年目からは目の不自由な子供達の為のおもちゃに意を絞り作業を進めていった。家庭訪問を何度もくり返し、今までに使ったおもちゃで不便だった点、こんなおもちゃがあつたらという意見を聞きながら、電子音を入れたボール（メロディーボール）や、手で触つて出来るゲームやパズルを商品化することができた。

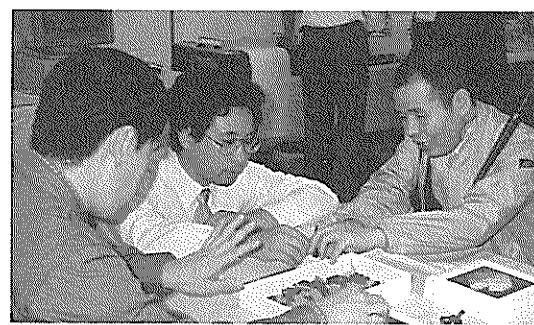
それにあたつては、盲児を持つ多くの両親を始め盲学校、特殊教育の専門家の方々に多くのアドバイスをいただいたが、商品化にあたつて一番力をいただいたのは、本間一夫館長（現理事長）を始めとする日本点字図書館（日点）の多くの職員の人達であった。日点では、視覚障害者の為に点字の本の制作・貸出を、点字が読めない人のためには本をカセットテープに朗読した物の制作・貸出を行つてある。そしてもう一つ、盲人用具（白杖・点字器・手で触つて分かる計器類等の日常生活用品）の販売と普及を主な業務としている。その用具部の部長が花島さんで、盲人用具のいろはも分からぬ私の相談に対してのアドバイスは的確で、なおかつそれはいつも「プラス思考」の考え方であつた。

当時まだ福祉の世界において、「営利目的」の企業は冷ややかな目で見られており花島さんの「プラス思考」

は、仕事をしていく上で原動力となつた。丁度その頃、「テルミ」という指で触つて見る盲児向けの絵本を創刊した小学館の相賀専務（現社長）と知り合い、小学館から出版されている弱視者向けの大きな活字本シリーズで、盲人用のゲームの紹介本（ゲームガイドブック）を取り上げていただいた。

その出版を機に、大活字本と盲人用のゲームの展示会を御茶の水の三省堂で、日本点字図書館主催、小学館・トミー協賛で行い、九日間の開催期間中七千人の来場者があつた。マスコミにも「画期的な展示会」と多く取り上げられた。その展示会での反響が元で、偶数月の第二日曜日に、子供から大人まで目の見える人も、見えない人も一緒にになってゲームを楽しむ『日点・ゲームを楽しむ会』ができ、今でもゲーム博士の異名を持つ草場先生を中心に毎回色々なゲームを楽しんでいる。

この会合が九年続いている一つの要因として、「楽しさ」を一方的に視覚障害者に押しつけるものではなく、参加者が一緒になつて「楽しさ」を作ろうとしているからではないかと思っている。



星川安之氏（中央）

三省堂での成功もあり、このままHT研究室は、順調に船出をするはずだったのだが、「円高」という日本の玩具メーカーにとつては、手痛い打撃を受けトミーも例外ではなかつた。希望退職を募り千人いた社員が半数になるといつた最悪の状況の中で、利益と直接結びつきにくくこの部署を残すべきか、廃止するべきか富山副社長（現社長）は、選択を迫られた。副社長室に呼ばれ「この状況下で、HT研究室を存続させるのは難しいがどうしたら良いか」と問われた。

私は今までこの仕事を関わってアドバイスを「無償」でしてくれた外部の多くの人たちのこと、そしてこれから計画のことを一生懸命話し、社長も真剣に聞いてくれた。もし、ここでトミーがこの仕事をやめてしまったら、おそらく他の玩具メーカーが同じようなことをしようとした時、躊躇する結果になるだろう。少し間をあけて副社長の出した結論は、一般玩具の開発との兼任で、仕事を続けるというものだった。ただし、景気が回復するまで予算は多少削つて行うということで、二時間に及ぶ話合いは終わった。削られた予算内でできることを考えた。製品を作るための金型代はない。

そんな時、盲児を持つお母さんから「家の子供は、目が見えないので、おもちゃ屋さんに行つてもどんなおもちやがあるのかわからない。なぜなら、多くのおもちやは、箱の中に入つていて、ショーウィンドーの中だつたりする。何かいい方法はないですか?」という便りをもらつた。今までには、作ることに頭がいっぱいですこまで気が回らなかつた。私がそこで考えたのは、点字によるおもちやのカタログ、目点の花島さんに相談した。答えは、「点字を習うのは、小学校に入つてからでおもちやを遊ぶ子供たの多くは、点字が読めない。いつそ、カセツトによる声のカタログにしてみたら」という意見だつた。

さつそく、トミーのおもちやの中で目の不自由な子供たちでも楽しめるおもちやを選び、シナリオを書いた。シナリオを書いてみると欲が出てきて、BGMや効果音も欲しくなり……でも予算はないし……と考えていると同じ開発部にバンドを組んで作曲もしている小塚さんという先輩がいると聞き、恐る恐る考えていることを話した。「いいよ」とあっけない答えと共に、一週間したらオルゴールの音色に似たオリジナル曲がおもちやの商品分だけできあがつてきた。世にも珍しい「声と音楽によるおもちやカタログ」は、こうして作られ、全国の盲学校、

盲児の施設、各地の点字図書館に配布された。初めての声によるカタログということで、また多くのマスコミが取り上げてくれたおかげで、資生堂、ソニー、ディズニーランド等が同じように商品や説明テープを作ってくれるようになつた。トミーのほうはといふと、二年目からはシナリオもバトンタッチして物語形式になり、社長もおもちやの国王様役等で声の出演をしている。毎年一回クリスマス前に完成させ、去年の暮れ出したのが八作品になつた。

共遊玩具

兼任で一般玩具の企画・開発を大部屋で行うようになって、慣れないヤスリや穴を開けるボール盤、旋盤等と悪戦苦闘し少々慣れてきた頃ふと回りで試作されている多くのおもちやを見ていると、このままでは見えない子供は遊びづらいけれど、「ここにちょっとしたポツチ」を付けたら目の見えない子供でも、十分使えるんじやないかと思えるものがいくつかあつた。丁度盤ゲームを作っている先輩がいて、そのことを話してみた。「ポツチを付けるくらい大したことないよ」という答えが次の仕事の始まりだつた。試作品を花島さんや、盲人の人達に見てもらい改良がなされ、一般の商品の中で目の不自由な子供たちも見える子供達も一緒に遊べるおもちやの第一号となつた。さらに話は発展し、このおもちやが、一緒に遊べることをより多くの人が知つてほしい、そのためにはおもちやの箱に何かマークがあつたらわかりやすいのではと、色々な図柄の候補をあげ盲学校の先生や盲児の親、目の見えない子供や大人の人達に意見を聞き、「盲導犬」によく使われているラブラドールレトリバーをデザイン化したものに決まつた。そして、マークを付ける商品は、いくつかの基準も同時に作つた。例

えば「スイッチ部のON側に小さな凸（とつ）がついている」「ゲームの駒等は相手と自分の駒が色以外にも手触りで判別できる」等十項目程のものである。

しかし、ここで一つの提議が社内で持ち上がった。もしこの基準を一社だけで決めてしまい、他のメーカーが逆の基準を作つたら、遊ぶ側が混乱してしまいかえつて不便になるのではないかというものであった。その意見に全員同意し、一九九〇年業界のまとめ役の社団法人日本玩具協会に「小さな凸の提案」という名称でトミーから提案を行つた。理事会にかけられ全員一致の賛同をえ、協会内に「小さな凸」実行委員会が発足したのは同年三月、奇しくもトミー内にHT研究室ができて十年目のことである。委員会では、盲導犬マークを表示する玩具を「晴盲共遊玩具」と名づけ、マークを表示するための玩具配慮点を「ガイドライン」の形にまとめ、多くの玩具メーカーに対し説明会を行つた。一年目二社から九点しかなかつた晴盲共遊玩具が四年目の今年は、二十五社から九十七点の玩具に盲導犬マークの表示がされている。その他委員会では、それらの玩具のカタログを点字・墨字（通常の文字）の二種類作成し、盲学校・点字図書館・希望があれば個人の方達へも配布している。この活動をおこなつていてる中でいくつか盲児を持つお母さん方から手紙をいただいているので二つを紹介したい。

「目の不自由な子供にも、遊べるおもちゃがあるのかとつても心配でした。そしたらおもちゃ屋さんに行き『盲導犬のマーク』と出会い大変嬉しかつたです。知らない間はいろんな多くあるおもちゃでは遊べず、すごく悩みました。子供がかわいそうでした。私みたいに知らない人がたくさんいると思います。多くの人に教えてください」……二才全盲児の母親。

「晴盲共遊玩具のお考えがあるとのこと。とつても嬉しかつた。ほとんどの場合、障害を持つ子供のおもちゃと

なると教材屋さんへ特注してから……という物が多い世の中。すぐ手にできる、耳に入れる、目にする幸せ……わかつてもらえますか？」……四才弱視女児の母親。

世界へ

毎年一度、世界の玩具協会の代表者が集まつて行う会議がある。一九九二年オーストラリアで行われた際、日本玩具協会から「小さな凸」の活動の紹介を行い、「盲導犬マーク」の世界共通化を提案したところ、満場一致で賛成され、一九九三年二月イギリスが、同年十一月アメリカが日本と同じ形でこの活動を開始した。言葉にすると簡単であるがそれぞれの国、英國の場合英國の玩具協会の会長で、トミーイギリスの社長でもあるピーター・ブラウンさんが英國王立盲人協会の人達と何度も会合を重ねスタートさせ、そのご尽力にはただただ頭がさがる。また、その他の国、フランス、スウェーデン、スペイン等も活動の準備をしているとのことである。日本でこの活動を推進している委員会の委員長は発足当初よりトミーの富山会長が努めている。その会長によく言われることがある。「星川、この活動はじっくり、長くやろうや」と。私も賛成である。



目の不自由な子供達も一緒に遊べる
おもちゃについているマークです



耳の不自由な子供達も一緒に遊べる
おもちゃにつくマークです

玩具協会で決めた基準、例えばスイッチのオン側に小さな凸を付けるということを、他の業界がオフに小さな凸を付けると決めたならば使う側はやはり混乱を招く結果となってしまう。そのため、「小さな凸」活動を行うのであれば玩具だけではなく早い時期にあらゆる業界と一緒になつて提案していくことが望ましい。日本での女性工業デザイナー第一号の鴨志田さんと知り合うことができ、日点の花島さんと私とで「どのようにしたら様々な業界から協力を得られるか」について話し合つた。その結果、歩き出しながらその答えを見つけていくことになつた。

「小さな凸」の多種業種版が『E&Cプロジェクト』という任意の団体としてスタートしたのは、そんなときさつで一九九一年四月のこと。メンバーは、家電、化粧品、日用品、OA機器、流通、旅行、テーマパーク、玩具等の企画・開発に携わる現場の人、福祉関係の仕事についている人、障害を持った人達。総勢現在八十五名が同じ目的、(障害を持っている人でも使いやすい製品『共用品』やサービス『共用サービス』をより多く普及すること)の下に、討議や作業を行つてている。

昨年の十月には銀座のソニービルで、共用品提案展を開き、多くの企業の人達が関心を示してくれた。視覚障害者二百七十九名のアンケート結果を元に、どのような製品・サービスのどんな点が不便で、製品を作る際どのように配慮してほしいかという提案である。その調査結果はメンバーの一人喜多川さんによつて、「朝子さんの一日」という絵本に生まれ変わり、小学館の財團・日本児童教育振興財團から出版していただき、一般の書店に

並んでいる。

自由学園で教わつたこと、そして…

この仕事を通じて解決したい課題はまだ山ほど残つてゐる。不便さを感じてゐる他の障害を持つた人達のこと、そして障害者、健常者を含めた人の気持ちのこと等々：私は自由学園の初等部に入学し、最高学部までの十六年間学園の教育を受けた。今振り返つてみるとそこで学んだ一番大きなことは「課題」の見つけ方と、その解き方だつたと思う。

自由学園では毎年十月十日に全校生徒が一年間学んだことを体操の演技を通して報告する会「体操会」が催される。現在一人の娘の父、及び卒業生両方の立場で楽しく見させてもらつてゐるが、異なつた立場で見ると新たな発見がいくつかある。

その一つは、幼児生活団の競走の一つ「輪ぐぐり」。大きな輪を六人で転がし、途中その輪をくぐつてゴールまで早く行つたチームが勝ちというものである。一人で行う競走と異なり、六人がそれぞれの力を出し合わないとあらぬ方向に進んでしまつたりその場で回転したりする。一つのチームの中には、足の早い子もいれば、遅い子もいるだろう。一人として同じ人・子供がいないのは一般社会も同じだ。けれども、たん力が合うと一人では決して出せない力とスピードが出る。その時一人として必要でない人はいない。

それを見ながら、おそらく十六年間自由学園は、そのことを私に繰り返し繰り返し教えてくれたのではないかと思う。

私が社会に出て見つけた「課題」は、一人では手も足も出ない代物だった。仕事を始めてから十年たつた時私は（達）の「輪ぐり」の輪の回りに人が現れ始め、十二年目でその輪に手を触れる人が出始め、十四年目にはその内の何人かが輪を押し始めてくれている。そして輪の回りに集まる人は、今も増え続けている。おそらく、色々な方向のベクトルが突如同じ方向に向いたとき、大きな音を立てて輪は転がり始めるのかもしれない。その時が楽しみだ。

（略歴）一九八〇年 男子最高学部（28回生）卒業

トミー入社 H・T研究室配属

一九八九年 日本玩具協会内に「小さな凸」

実行委員会発足

一九九〇年 E&Cプロジェクト発足

現在 トミー商品開発部主事

日本玩具協会「小さな凸」実行委員会事務

局次長 E&Cプロジェクト事務局長

自由学園 略年譜

- 一九二一年（大正十年）四月十五日 女子のための中等教育を行う各種学校として創立される。入学者二十六名。
- 五月五日 年限二年の高等科開校。
- 一九二三年 四月十八日 第一回卒業式。卒業生三十五名。
- 一九二七年（昭和二年）四月 初等部創立。授業は目白で行う。のち一九三〇年に南沢の新校舎に移る。
- 一九三二年 八月 羽仁もと子先生、ニース世界新教育会議で講演。主題は「変遷しつつある社会と教育」
- 一九三三年 六月 目白で工芸研究所発足。
- 一九三四年 九月 女子部、南沢の新校舎に移る。この年大冷害に見舞われた東北地方に農村セツツルメントを設立、農村婦人たちの生活啓蒙運動を開始する。
- 一九三五年 四月 男子部開校。第一回入学者は二十三名。十一月第一回体操会。
- 一九三七年 全校で音楽一斉教育始まる。
- 一九三八年 一月 男子部東天寮落成。
- 五月 北京に生活学校を開校。中流以下の小学卒業の女子二十人を選び、生活教育を始める。
- 六月 女子部農村セツツルメント農繁期託児所で働く。この働きは戦後まで継続される。
- 一九三九年 一月 幼児生活団 目白で始まる。
- 六月一日 日比谷公会堂において音楽一斉教育発表会を開催。十月二十一日関西でも同発表会を行う。
- 一九四〇年 四月 男子部六回生入学とともに寮で自分が使う「雲水机」を作成。
- 一九四一年 七月 那須農場開墾に着手。十一月に開場式。

十一月 学園第三の植林地として栃木県黒羽の国有地を借り受け、植林作業が始まる。
一九八五年
一月一二日 新理科室竣工式。

四月 昨年より静養中の学園長を補佐するため、理事の齋藤光先生が学園長補佐、同じく理事の羽仁穂先生が副学園長となる。

六月八日 昭和二十六年に始められた植林の勉強が認められ、朝日森林文化賞の森づくり部門奨励賞を受賞。

一九八八年
一月十一～十三日 第二十四回美術工芸展開かれる。

一九八九年
(平成元年) 一月十日 清風一寮落成式。

一月十五日 学園長羽仁恵子先生、二宮友情庵で心不全のため永眠。

一月十九日 練馬文化センターで音楽会。

一月二十日 記念講堂で葬儀。司式は左近淑先生。

一九九〇年
一月十五日 学園長羽仁恵子先生、二宮友情庵で心不全のため永眠。

四月 齋藤光先生が新理事長、羽仁穂理事が学園長に就任。左近淑先生司式の下、十日に新学園長就任式が行われる。任期は四年。

七月十八～二十八日 男子学部有志二十名、教師と共にネパールのデューリケル村で植林。以後毎夏行う。

一九九一年
五月十七、十八日 創立七十周年記念教育報告会を記念講堂で全校で行う。お客様には記念体育館で昼食をお出しし、午後はマイボールダンス、音楽の演奏を行う。

一九九二年
十月十二日 台風のもたらす大雨のため、体操会は二日延期の後、中止。

一九九三年
三月十六日 創立七十周年記念事業の一つである、羽仁吉一先生記念ホール落成式。

九月五日 七十周年記念事業の初等部体育館棟落成式。

十月十三～十五日 第二十五回美術工芸展開かれる。

一九九三年
五月十九日 婦人之友創刊九十年を祝う大会(日本青年館)で男女学部生、高等科生徒の一部がお祝いの音楽

を演奏。指揮は山本直純先生。

七月三十日～八月一日 女子部男子部の代表、秋田、八戸、仙台で「自由学園の生活と勉強の報告会」を行う。

自由学園の手紙 I 卒業生の歩んだ道 定価2000円(税込)

1994年5月1日初版発行

1994年8月10日2版発行

発行所 自由学園出版局
〒171 東京都豊島区西池袋2-31-3
電話03(3971)7535・振替東京7-33200

発売元 婦人之友社

〒171 東京都豊島区西池袋2-20-16
電話03(3971)0101・振替東京3-11600

©1994 ISBN4-8292-0157-6 Printed in Japan 印刷 大日本印刷株式会社